二〇二一年度

晃華学園中学校

第一回 入学試験問題

【国語】

時間：五〇分
配点：一〇〇点

答えはすべて解答用紙に記入すること。

問題は次のページから始まります。

一　中学二年生の「千弦」は、音楽学校を目指して本格的にピアノの練習をしており、母親はそれを必死で応援していましたが、スランプにおちいり、思うようにピアノが弾けなくなっていました。妹の「響音」は六年生で、叔母の「燈子」に誘われて、友人たちと「ふるさと文化祭」に向けて歌やダンスの練習に打ちこんでいました。そのような時、父は二人の娘に、しばらく祖父母の家で暮らしてはどうか、と提案します。本文はその続きの場面です。文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。

お昼すぎ、お父さんにつれられて、千弦がおじいちゃんの家にやってきた。

「①あの……おじいちゃん、おばあちゃん、ごめんなさい」

暗い表情で頭を下げた千弦の肩を、おばあちゃんがさすった。

「千弦ちゃんがあやまることなんて、なんにもないわよ。わたしたちは大歓迎なんだから。……で、千弦ちゃん、決めてきたわよね」

「え……、なにを？」

おばあちゃんは、あらあら、と手をひらひらさせた。

「おじいちゃんとおばあちゃん、どっちに弟子入りするかよ。響音ちゃんは音楽修業中で、おじいちゃんの弟子はお休みしてるようだけど、千弦ちゃんはどうするの。陶芸？　菜園づくり？　お菓子、お料理、お裁縫、着物の着付け……」

目をまたたかせる千弦に、おばあちゃんはにっこりと笑った。

「まかせなさい。おばあちゃんに弟子入りするからには、お店よりおいしいチーズケーキをつくれるようになるからね」

「う、うん。よろしくお願いします」

千弦は、おばあちゃんの弟子になることが決まったようだ。

お父さんが収納ボックスをかかえて、二階の部屋へと運ぶ。響音も荷物運びを手伝った。しょっちゅう泊まっていた響音とちがって、大荷物だ。

千弦の部屋は、むかしのお父さんの部屋だ。響音も朝からかたづけを手伝い、物置のようになっていた部屋は、見ちがえるようにきれいになった。運びだした粗大ゴミは、燈子が車でクリーンセンターへ捨てにいっている。

「あれ？　お父さんのポスター、なくなってるじゃないか！」

収納ボックスを壁ぎわに置いて部屋をぐるりと見まわしたお父さんが、壁を指さして［　A　］顔をした。その顔がおかしくて、千弦と響音はくすくす笑う。

「お父さんのポスターって、たしか、ＳＬ写真とガンダムでしょ。わたしいやだよ。響音、よくぞはがしておいてくれたわ」

「ねー！　ぜったい、千弦ちゃんの趣味じゃないって思ったんだ。お父さん、だいじょうぶだよ、捨ててないから。しまっただけ」

「……響音は燈子の部屋を、ほとんどそのまま使ってるくせに。だいたい、ガンダムじゃなくてボトムズだし」

お父さんは、すねた口調で文句を言った。

響音は千弦とふつうに話せるかどうか自信がなかったけれど、顔をあわせればなんてことはなかった。むしろ家にいたときよりも自然に話せる。

玄関から「ただいまあー」という燈子の声がきこえた。

「お、来たね、千弦ちゃん。しばらくのあいだ、ヨロシク！」

「よろしくお願いします。あの、わたし……」

ぎこちなさを見せる千弦に、燈子は手をひらひらさせた。

「かたい話はなし。気をつかったりしないで。こっちも、いつもどおりにしかしないもん。千弦ちゃんも、やりたいことあればなんでも好きなことしなよ。もしピアノ弾きたかったら、わたしの部屋にかってに入っていいから」

ピアノの話題に、千弦の顔がかたくなるのがわかった。けれど、部屋に入ったあと、

「ね、燈子さんのしぐさ、おばあちゃんそっくりだったね」と笑った。

荷物を運びこんで一段落すると、お父さんは一階の居間にみんなを集めた。

響音、千弦、おじいちゃん、おばあちゃん、燈子の全員をまえに、話をはじめた。

「②おじいちゃんちでのホームステイ、とつぜんでびっくりさせたかもしれない。お父さんがかってに決めてしまって、悪かった。燈子も、せっかくの日曜に手伝ってくれて、ありがとな」

お父さんがしんけんな話をはじめたとわかって、響音も千弦もきちんと正座をする。おじいちゃんたちも、まじめにお父さんを見た。

「お父さんは、家族とか、ともだちとか、そういう③人間関係っていうのは、ジグソーパズルみたいだなって思うんだ。色も形もちがうピースがあわさって、ひとつの絵をつくる。でも、じぶんの色や形しか見なくなると、少しずつ形がゆがんでいって、つなぎ目がす

きまだらけになる。いまうちの家族は、つなぎ目に少しすきまができて、ぐらぐらしているパズルなんじゃないかな。だから、落ちついてピースの形を整える時間をつくろうって考えた。いままでとは、まったくちがうピースになってもいい。だけど、きっとまた、ひとつの絵をつくれるようになる。④まえよりもっとすばらしい絵だ。そのために、お父さんとお母さんも、いままでのこと、これからのことを、話していこうと思ってる」

お父さんは、おじいちゃんたちに向かって、頭を下げる。

「おやじ、おふくろ、燈子、ふたりのことをよろしくお願いします」

千弦は少し考えたあと、おじいちゃんたちに向きなおって、「よろしくお願いいたします」と、きちんと頭を下げた。

響音もあわててまねをする。けれど、いつも顔をあわせているおじいちゃんたちに、あらたまったあいさつをするのは、ちょっと

B

。

おじいちゃんは、うむ、うむ、とうなずいた。

「⑤子どもたちがいるところ、いないところで、親どうしもゆっくりじっくり話しあえ。子育てなんてなあ、子ども百人いりゃあ百とおり、親が百人いりゃあ千とおりってもんよ。そうそううまくいってたまるかい。おしあいへしあいして成長するもんだ」

「母親だ父親だっていっても、はじめての経験だもの。失敗くらいいくらでもするわよ。わたしだって、『おばあちゃん』をやるのははじめてなんだから」

おばあちゃんの言うとおりだ。お父さんが「お父さん」をやるのも、お母さんが「お母さん」をやるのも、生まれてはじめてのことだ。まちがえることだって、たくさんある。

響音だって、「お父さんとお母さんの娘」や「千弦の妹」をはじめてやっているのだ。千弦のようすがおかしいと気づいたとき、さけたりせずに、もっと話せばよかったし、言わないでと言われても、お父さんとお母さんに相談すればよかった。

いまからでも、きっとだいじょうぶ。きちんと話しあえば、よくなっていける。

「家族はジグソーパズルか。兄さん、なかなかおもしろいこと言うじゃない」

ふふん、と燈子があごを上げる。

「⑥おまえの影響（えいきょう）で、千弦と響音のピースがとんでもない形になったら困るなあ」

「とんでもないとは失礼な。そうなったらなったで、斬新（ざんしん）な絵ができるでしょ」

あははは、とみんなが笑った。

二階の部屋に戻ると、千弦が軽い息をはいた。

「きのう、お父さんが『おじいちゃんの家にホームステイするか』って言ったとき、⑦なんか、ほっとした。ああ、お父さんは、わたしのこと気にしてたんだなあって。お父さんは響音ばっかりだと思ってたから。きっと響音は逆だったね。お母さんはわたしにつきっきりで、ほったらかしにされてるって思ってたよね」

響音は、上目づかいで千弦を見る。［　C　］、とは言えなかった。

「おじいちゃんちに来られてよかった。お母さんと、気まずかったし。放課後もともだちはみんな部活か塾で、話し相手もいないし。ここなら、響音もいるし」

千弦はにっこりと笑って、響音のほっぺたを指でつついた。

このおじいちゃんちステイは、お父さんが言ったように、じぶんとまわりとを見つめなおしていくためのものだ。ピースの形を整えて、またひとつの絵をつくれるように。

それと関係するかはわからないけれど、響音はふるさと文化祭の舞台にいっしょうけんめい打ちこもう、と思った。

⑧千弦もこの家でゆっくりすごしていれば、いきいきとした音でピアノを弾く千弦に戻るだろうか……。

おじいちゃんの家に来てから二、三日は、緊張もあったのか、千弦の態度は少々ぎこちなかった。けれど、放課後まっすぐに帰ってきて、おばあちゃんと台所に立ったり、部屋で本を読んだりしてすごすうちに、ぎこちなさは消えて表情も明るくなっていった。

（小俣麦穂『ピアノをきかせて』）

問一　――線部①「あの～ごめんなさい」とありますが、「千弦」がこのように言うのはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　自分のせいで親戚全体を巻き込む騒ぎとなり、祖父母にまで心配をかけてしまったことを後悔しているから
イ　自分のピアノが行きづまったため、祖父母の家に泊まることになり、迷惑なのではないかと思っているから
ウ　家事が得意ではない自分が一緒に暮らすのは、祖父母にとって負担が大きいのではないかと案じているから
エ　ピアノに打ちこむあまり、祖父母の世話をしてこなかった自分が、逆に世話になるのは申しわけないと思っているから

問二　［A］、［B］にあてはまる言葉を次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　気はずかしい　　イ　なさけない　　ウ　後ろめたい　　エ　落ち着かない　　オ　あどけない

問三　――線部②「おじいちゃんちでのホームステイ」とありますが、これは「響音」にとって、どのようなものですか。適当な言葉を本文中から二十五字以内で探して、はじめとおわりの五字をそれぞれぬき出しなさい。（なお、句読点や記号も一字に数えます。）

問四　――線部③「人間関係って～思うんだ」とありますが、これはどのようなことを表していますか。四十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問五　――線部④「まえより～すばらしい絵」とありますが、ここでは具体的にどのようなことを指していますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　身の回りの生活を大事にして、手仕事の良さを分かち合える関係が生まれること
イ　自分より家族を大切に考えることで、困難に立ち向かっていく団結力ができること
ウ　家族の中で互いの個性を生かして、新しいものを生み出す独創性が生まれること
エ　一人一人が自分を見つめ直すとともに、互いに支え合える関係ができること

問六　――線部⑤「子どもたち～話しあえ」とありますが、この言葉には、「おじいちゃん」のどのような気持ちが表れていますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　子育てには苦労がつきものなので、自分たちのような年寄りの知恵にも耳を傾けてほしいとたしなめる気持ち
イ　まず親どうしが子育てのなやみを話し合うことで、ぎくしゃくした家庭内の雰囲気が変わると期待する気持ち
ウ　子どもと向き合いながら、親どうしも話し合いを重ねて、より良い家族関係を作ってほしいと励ます気持ち

エ　家族関係は子どもの成長と共に変化していくので、親が変わらなければ問題は解決しないと反省を求める気持ち

問七　――線部⑥「おまえ～困るなあ」とありますが、この言葉には「お父さん」のどのような気持ちが表れていますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　燈子たちと暮らすうちに、娘たちが人間関係について深く考えるようになると予感している
イ　燈子の気ままな性格によって、二人の娘がさらにわがままになることを恐(おそ)れている
ウ　燈子との関わりを通して、二人の娘に良い変化が起こることをひそかに期待している
エ　燈子たちとの暮らしが気に入って、娘たちが家に戻らないのではないかと心配している

問八　――線部⑦「なんか、ほっとした」とありますが、「千弦」がこのように思ったのはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　父は妹のことばかり気にかけており、自分には関心がないと思っていたから
イ　父は、ピアノのことしか頭にない自分と母を見放していると思ったから
ウ　自分がピアノで伸(の)びなやんでいることに、父は気づいていないと思っていたから
エ　家族がぎこちない雰囲気になっているのを、父はピアノのせいにしていると思ったから

問九　［　C　］にあてはまる言葉を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　うまくいくかな　　イ　こんなはずじゃなかった
ウ　そんなことないよ　　エ　これからどうなるんだろう

問十　――線部⑧「千弦も～だろうか……」とありますが、この時の「響音」の気持ちはどのようなものですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　家で暮らしていた時と違って祖父母の家で多くの人と関わりを持つことで、「千弦」は気持ちがほぐれ、ピアノの演奏に耳を傾けてくれる人々に感謝するようになるだろう

イ　心の重荷になっていたピアノや母との関係から離れて祖父母の家で過ごすことで、「千弦」は自分や周囲を見つめ直し、もう一度ピアノを楽しむ心を取りもどすのではないか

ウ　祖父母の家で暮らす中で心をこめて家事に取り組むことを学び、「千弦」はそれまでの自分の甘さに気づき、今までより積極的にピアノに励むようになるにちがいない

エ　家にいた時のようなピアノ中心の生活から離れて祖父母の家で過ごすことによって、「千弦」は自分のよりどころを失い、ますます立ち直れなくなるかもしれない

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1　風景を再現する

①俳句と短歌はよく似た短詩形の文学ですが、二つの間にはかなり大きな差があります。言うまでもなく、短歌は五七五七七の三十一音、俳句は五七五の十七音です。この音数の差は決定的で、短歌はその中で喜びや悲しみを直接言葉にする余裕があるのに対して、俳句にはそのゆとりがないのです。これをたとえて、短歌は音楽に近く、俳句は写真や絵画に近いという人もいます。つまり、俳句は十七音で風景を切り取った文学であると言えるでしょう。

そうは言っても、たった十七音で風景を描くのですから、事細かに描写することなどとうていできません。当然のように、省略が必要になってきます。この省略を頭の中で補って、描かれた風景を脳裏に再現することができるかどうか。これが俳句の②鑑賞の第一歩であると言えるでしょう。

早速、次の句を例に考えてみましょう。

絶えず人いこふ夏野の石一つ　　正岡子規

『子規句集』

季語（＝季節を表す言葉）は「夏野」、夏のひらけた野原を思ってください。旧かな遣いで書かれている「いこふ」は漢字で書けば「憩う」で、「休憩する」の意味の動詞です。もう一つ、俳句の基本的な用語を説明しておきましょう。俳句の五七五を三分割したとき、この句の場合、最初の「絶えず人」の部分を上五、次の「いこふ夏野の」を中七、最後の「石一つ」を下五と言います。

さあ、この句はどんな風景を詠んだものか、頭の中で想像してみてください。中学生に授業でこの句を鑑賞させてみると、だいたい次の二つの読みが出てきます。

A、夏野には絶えず大勢の人が休んでいる。その夏野に一つの石が落ちている。

B、夏野に沿った道に大きな石が一つある。その石に旅人が絶えず入れ替わり休んでいる。

皆さんは、どちらの読みをしましたか。文法的に、中七の「いこふ」が直後の「夏野」を修飾していると考えればAの読み、下五の「石一つ」に掛かると考えればBの読みになります。文法的にはどちらも間違いではありませんので、それだけではA・Bどちらかに決めることはできません。

問題は、どちらの読みがこの句の鑑賞としてより面白いかということです。作者がどこにいてどんな視点でこの句を詠んでいるのかを想像してみるとよいでしょう。Aの読みだとすると、この石はさほど大きな石でなくてもよいわけですから、作者自身が夏野の中に休んでいて、そのすぐ脇に一つの石を発見したという風景になります。一方、Bの読みだとすると、作者は少し離れたところから夏野道に置かれた大きな石を見ている構図になるでしょう。［　　1　　］という風景です。

どちらの方が、この句の鑑賞として面白いかと言えば、明らかに［ア］の読みだと思われます。なぜなら、そうでなければ「石一つ」という下五に意味がなくなってしまうからです。［イ］の発見を詠むならば、「絶えず人いこふ夏野に石一つ」と助詞を変えた方が意味がはっきりしますし、そもそも発見したものが「石」である必然性が感じられません。一方、［ア］の読みは、多くの旅人を休ませて見送ってきた夏野の石の存在に③主眼を置いた鑑賞になっています。そのように考えれば、最後の「一つ」という数詞も利いてくることがわかるでしょう。

俳句鑑賞の第一歩は、このように句に描かれた風景を脳裏に思い浮かべてみることにあります。［イ］の読みをしてしまった人も、

ここでがっかりする必要はありません。これから多くの句に触れる中で、自然と風景が再現できるようになってゆきますので、安心してください。

2　切字の使い方を理解する

俳句の用語で「切字」という言葉を聞いたことのある人は多いでしょう。切字となる言葉はたくさんあるのですが、中でも三大切字と言ってよいのが「や」「かな」「けり」です。この三つの切字の使い方について、順に説明してゆきたいと思います。

(1)「や」は文字通りそこで切れる

啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々　　水原秋櫻子『葛飾』

この句の季語は上五の「啄木鳥」です。高い木の上で木をつつくこの鳥は、秋の季語になっています。この句では、「啄木鳥」という四音の季語の下に切字「や」がついて、ここで意味的に切れる構造になっています。イメージとしては、

啄木鳥や／落葉をいそぐ牧の木々

という感じで、中七・下五は啄木鳥とは別の情報です。「牧」とは牧場のことです。晩秋の牧場では辺りに啄木鳥の木をつつく音が響く中、木々がどんどんと葉を落としてゆく、そんな情景を詠んだ句です。

このように、「や」という切字はその名の通り、そこで意味的に切れることを表す切字なのです。短い俳句の中に、④二つの情報を効率よく詠み込むために、「や」という切字は欠かすことができません。そして、この句のように二つの情報を詠み込んだ句のことを、俳句では「取り合わせ」と呼んでいます。上五に「や」を用いたこの句は、典型的な取り合わせの句だと言えます。

では、もう少し深くこの句を鑑賞してみましょう。この句は、どんなものとどんなものの取り合わせになっているでしょうか。

皆さんが啄木鳥の存在に気付くとすれば、おそらくは木をつつくドラミングの音で認識するのではないでしょうか。つまり、上五の「啄木鳥や」は［X］的な情報と言えます。一方、中七・下五の落葉は目で見るもの、つまりは［Y］的な情報です。この句は、［X］と［Y］を取り合わせることで、晩秋の牧場の風景をよりリアルに描いているのです。

「や」を用いる場所もさまざまです。例えば、次の句は教科書にもよく引かれている句ですから、知っている人も多いでしょう。

万緑の中や吾子の歯生え初むる　　中村草田男

『火の島』

季語は「万緑」、木々が緑に生い茂った様を言う夏の季語です。この句では、「や」が中七の途中に使われています。このような切れ方を中間切れと言って、

万緑の中や／吾子の歯生え初むる

のように切れています。

中七の「吾子」とは「我が子」の意味です。ようやく歯が生え始めたというのですから、まだ幼い赤ん坊を詠んでいます。では、この句は⑤どんなものとどんなものの取り合わせになっているでしょうか。

前半の季語「万緑」は言わば自然の豊かな生命力を象徴している季語です。一方、後半の幼な子の歯が生え始めたという内容は人間の子どもの旺盛な生命力を詠んでいます。つまり、両者をつなぐテーマは「生命力」ということになるでしょう。自然の生命力と、赤ん坊の生きる力とが互いに呼応し合っているところが、この句の最大の魅力だと言えます。

「や」という切字の使い方を理解しておくだけで、俳句の鑑賞はずいぶん簡単に感じられるようになるでしょう。「取り合わせ」という用語は、この後も出てきますので、覚えておいてください。

(2)「かな」「けり」は感動を表す

次に、切字「かな」を用いた句を見てみましょう。

金亀子擲つ闇の深さかな　　高浜虚子

『虚子全集』

この句の季語は「金亀子」、かなぶんの仲間で夏の季語です。その下の「擲つ」という動詞は、強く投げるという意味です。まずは、この句がどのような場面を詠んだものかを考えてみましょう。

ヒントは「金亀子」という昆虫の習性にあります。こがねむし、かなぶんなどの甲虫は、夜になると灯りを目がけて飛んできます。現代の都会ではちょっと考えられないかもしれませんが、昔はエアコンなどもなく窓を開け放っていましたから、家の中にこがねむしが飛び込んできてしまったのでしょう。作者はそれを捕まえて、窓の外へ強く放り投げた（＝擲った）のです。さあ、⑥その後このこがねむしはどうなったでしょうか。

それを考える上でポイントになるのが、後半の「闇の深さかな」という部分です。もし、放り投げたこがねむしが隣の家の壁にあたって鈍い音を立てたりしたら、「闇の深さ」という把握にはならなかったでしょう。おそらく、このこがねむしは［　2　］のではないでしょうか。そこで気付いた夏の夜の「闇の深さ」が、この句における作者の感動の中心なのです。それを表しているのが、句末に置かれた「かな」という切字の働きです。

つまり「かな」という切字の働きは、「や」のようにそこで意味が切れることを表すのではなく、「かな」の使われている箇所が一句の感動の中心であることを表すことにあります。また、「や」を使って切った句の多くは「取り合わせ」の句になりますが、虚子のこの句は取り合わせではありません。上五から下五までが一つのフレーズになっていて、「金亀子」のことだけを詠んでいます。このように、季語のことだけを詠んだ句のことを「一物仕立て」と言います。すべての俳句は、「取り合わせ」か「一物仕立て」のどちらかだと考えて差し支えありません。

（佐藤郁良『俳句を楽しむ』）

問一　――線部①「俳句と短歌」とありますが、それぞれどのようなものを表現するのですか。本文の言葉を用いて三十字以内で書きなさい。

問二　――線部②「鑑賞」、③「主眼を置いた」のここでの意味を、次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

②「鑑賞」
ア　感心しほめること
イ　眺めて楽しむこと
ウ　理解し味わうこと
エ　想像し補うこと

③「主眼を置いた」
ア　最も大事だと考える
イ　最初にとりかかる
ウ　気持ちを推測する
エ　疑問を投げかける

問三　［1］にあてはまる言葉は何ですか。最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　大きな石が旅人を休ませていることに感心しながらその石の側を通り過ぎていった
イ　旅人たちが我先にと石に腰かけようとしている姿をほほえましく眺めている
ウ　旅人たちを休ませているものが何なのか見極めようと近づいていった
エ　その石に腰かけて休んでは旅立ってゆく旅人たちを遠く眺めている

問四　［ア］、［イ］には、文中のA・Bのいずれかの読みが入ります。それぞれどちらが入るか、記号で答えなさい。

問五　――線部④「二つの情報」とありますが、この「啄木鳥や～木々」の句の中の「二つの情報」として正しいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　落葉と秋　　イ　牧場と啄木鳥　　ウ　啄木鳥と落葉　　エ　秋と啄木鳥

問六　［X］、［Y］に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　X　生物　Y　植物　　イ　X　聴覚　Y　視覚
ウ　X　動　　Y　静　　エ　X　理論　Y　感覚

問七　――線部⑤「どんな～でしょうか」とありますが、この句の中に取り合わせられているものを本文中から二十字以内で抜き出し、最初の五字を書きなさい。なお、句読点や記号なども一字に数えます。

問八　――線部⑥「その後このこがねむしはどうなったでしょうか」とありますが、これに対しての筆者の答えは［2］に入ります。ここに当てはまると考えられる内容を、本文に沿って三十字以内で書きなさい。

三　次の①～⑥の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

① 砂糖をセイセイする

② リュウヒョウに乗る白熊（しろくま）

③ 他国とコウエキする

④ 会場をセッエイする

⑤ 登山のソウビを整える

⑥ 山のイタダキ